

## 現代日本における学問誕生の契機

京都大学大学院農学研究科森林科学専攻樹木細胞学分野修士課程一年 船木みあさ

ピロソピアーが「知の愛求」を意味するならば、人類が持ち得る内面的な働きによる賜の一つと考えられる。いつ、「知を愛求す」という内面的な働きを持つようになったか定かではない。しかし、前段階として「知りたくて惹きつけられる」という内面的な働きを想定すると、これは野生チンパンジーにもみられる。例えば、マハレを調査地として現在、チンパンジーを研究している中村美知夫によって、チンパンジーの母親がオオアリ釣りをしている手付きを彼女のアカンボウが覗き込む様子が観察、記録されている。これは「知りたくて惹きつけられる」という内面的な働きの発露とみることができ、人類とチンパンジーの共通祖先もこの内面的な働きを獲得していると考えられる。

「知りたくて惹きつけられる」という内面的な働きを持ち、一つの集団として誕生した人類は、時とともにある程度のまとまりで新しい集団となって分散し、その先々で各々の歴史、文化、そして自分達のルーツの説明を一つの目的とする神話を持つようになった。よって、各々の集団間に分散後の違いは生じようが、集団同士の優劣はない。

日本列島に移り住んだ人々が「知を愛求す」という内面的な働きを持つに至っていることは、古くは中国文明を、新しくはヨーロッパ文明を取り入れ、消化吸收し、自らのものに行っていることから容易に理解できる。例えば、日本人は中国人から縦書きを、ヨーロッパ人から横書きを学び、いわば縦書きと横書きの交点で両者の書き方を操り、自らを表現する手段に成し得ていることがあげられる。

ところで、日本人が縦書きと横書きの交点に居得るのは、表面上の違いにとらわれず、柔軟に対処して合意できそうなどところを見極め、まるくおさめて事を運ぶのを好む傾向があるからと思われる。また、この心は、日本神話に、微笑ましくも皆が頷いて聞ける筋が通っていることにも見受けられる。

ここで、「いま日本で哲学するという事」というテーマが昨年、ワークショップで取り上げられたことを注視したい。静かで熱い議論の中、哲学と科学は分かち難く結びついている。ということに関しては意見の一致が見られた。これは、ピロソピアーが古代ギリシアにおいて誕生した時、そうであり、本来そういうものであると考えられるからであろう。

それでは、日本において今が、古代ギリシアにおけるピロソピアー誕生時に相当する。と、見ることは出来ないだろうか。縦書きと横書きの交点で、日本神話に流れる心をもとに、日本人の柔軟な思考力と澄んだ観察眼を端緒として、まだ命名もされていない学問誕生の契機と考えることは出来ないだろうか。本発表では、この考えに至った思考過程を辿り、この学問とはどのようなものか一案を述べることを目的とする。

## ポリテア篇におけるプラトンの問答法による教育

幼児教育専門学校 (元) 東 敏徳

プラトンのポリテア篇について、これまでの教育学からの研究は、ソクラテスとプラトンの教育論を峻別する立場に立っていた。そこでは、弁明篇におけるソクラテスの知らないことは知らないとする主張を、無知の知と訳する捉え方を踏襲し、産婆術をソクラテス的教育方法として、初期対話篇の中に位置付けてきた。これに即し、向け換えや染色の仕方に擬えた方法を、中期以降の対話篇に反映されるプラトンに固有となる教育方法として対比してきた。(村井実、1991、『教育思想I』40頁)

これに対して、本発表はプラトン教育論の特徴を、ディアレクティケー問答法の中に集約する解釈を提示する。本発表では、問答法は段階的発達を促進する過程であると主張する。本発表はアンナスの次の指摘、ポリテア篇における「焦点は国家よりも個人に置かれている」(Annas, J., *An Introduction to PLATO's REPUBLIC*, 2009, p.294) という指摘を踏まえ、ポリテア篇に示される問答法をプラトンによる教育活動を標した個別の実践記録と見る観点から分析をする。

最初に、ポリテア篇VII巻に示されるプラトンの教育に対する姿勢が次のように構成されていることを示す。プラトンでは「教育とは魂の中には知識がないから、知識を中に入れてやるのだというようなもの」(518B-C) ではないとされ、問答法の目的を、「善であるところのものそれ自体を直接把握する」(532B) ところから、「本来のあり方の理解を自他に対しても与えること」(534B) によって「自分を完全に確実なものにする」(533C) とされる。そのため問答法は段階、これまで当然としてきた見解を問う段階、続いて「事項自体のあり方を基準とし吟味しようとして熱心に努める」(534B) 段階、それを通じて「不倒の言論をもって最後まで進む」(534C) という段階からなる。

上の整理からVI巻における太陽の比喩が持つ理論的役割が明示される。問答法による対話は成長を促す。太陽光があると「光がわれわれのために、視覚をして最もよく見るようにさせる」(508A)。同様に、魂の目が見る世界でも、「知られる世界においてもつ関係は...見られる世界に対してもつ関係とちょうど同じ」(508C) であるとされる。問答法による対話を踏まえることで、思い込みに捕われた状態から解放され(519B)、「向き直る」(栗原裕次、2013、『イデアと幸福』224頁) ために対話的問答法は始められると言う。向き直りは思い込みからの解放の後に自発的に起こる。本発表はここから対話は向き直りを促すと位置付ける。プラトンには「教育は...ひとりひとりの人間が持っているような機能と各人がそれによって学び知るところの器官をどうすれば達成されるかを考える」(518C-D) 向き直りの促しであるとする教育論がある。問答法による対話は自発的な向き直りを促す起因となる観点があると指摘できる。

附記 ( ) 内の数字はステファヌス版プラトン全集への参照のために示す

## スピノザの存在論における二つの時間システム

鹿児島大学 柴田健志

スピノザの存在論には二つの時間システムがある。「永遠」と「持続」である。これらは別々の存在領域に関わる時間システムではない。「現実存在」という同一の存在領域に関わる時間システムである。ただし、これらは同等の位置に置かれているのではない。「現実存在」とはその本性において「永遠」であるというのだ。では、いったいどんな意味において「現実存在」が「永遠」であるといわれるのだろうか。また、「現実存在」を「永遠」とみなすような特殊な存在論において、「持続」はどんな意味を持つのであろうか。これらの問いかけをもとに、時間論の観点からスピノザの存在論がとらえ返される。もっとも重要な課題は、「永遠」という時間システムの中に「持続」という時間システムが発生する論理を『エチカ』のテキストによって再構築することである。「永遠」の中に「持続」が発生する論理とは、神の中に人間精神が発生する論理にはかならないという点が明らかにされる。「直観知」の理解にとってきわめて重要な帰結がそこから導き出される。

「現実存在」の意味は《現在》である。それゆえ、「現実存在」することが本質である神にとっては《現在》があるだけである。それが「永遠」という言葉の意味である。神の無限の変容はその都度たんなる《現在》であって、前の状態から次の状態への変化として認識されていないのだ。これに対し、人間が「現実存在」することは人間の本質ではない。それ自身によってではなく、他のもの（神）によって決定されていると考えられるからである。ただし、「現実存在」に決定された以上、人間もその意味を知っている。つまり《現在》という根源的な時間によって「現実存在」を認識している。人間が《現在》を過去と未来の間において表象するのは、それ自身の「現実存在」の真の原因を知らないからなのだ。その代用品として「これまで現実存在し、これからも現実存在するもの」という形で自己の「現実存在」を了解しているにすぎない。これが「持続」という時間システムの機能である。人間の本質である「コナトゥス」が「持続」の中にあるといわれるのはこの意味においてである。しかし、「持続」というある種の虚構の中で《現在》はそのリアリティーを失っていない。むしろ過去・現在・未来という時間構造は《現在》を支えにしなければ維持できないと考えられる。だからこそ、自己および世界を「持続」というアスペクトにおいて認識している人間精神が、「永遠」というアスペクトにおいて自己および世界を認識するという「直観知」の可能性が主張できるのである。

本発表は、18世紀スコットランドの哲学者デヴィッド・ヒュームの主著『人間本性論』で展開される因果論において見え隠れする規範性の起源が、人間の生存的本能に見出されることを主張するものである。我々が因果推論を行う時の精神メカニズムの分析を通し、隣接、継起、恒常的随伴という三関係を発見する議論は有名であるが、ヒューム因果論の後半部において、我々が因果推論を行う際に精神に生じる信念 (belief) を分析する議論もまた注目に値する。この因果的信念は、その抱かれ方の強弱に従って、我々が特定の因果推論に対して持つその推論の「正しさ」が左右されるものとされる。ここにおいて、なぜ特定の推論に「正しさ」が付与させるのか、という規範性の根拠が問題となる。

この問題に対しては、この「正しさ」の判断が、明証性の度合いに応じて三種に区分された理性的判断能力によってなされること、およびその源泉が「習慣」と「経験」にあることはヒュームのテキストにおいて明らかであるが、その判断能力が具体的にいかなる機能であるのか、そしてそれがなぜ「正しさ」を担保することができるのか、という点に関しては、解釈の余地がある。この問題に関するビーチャムのまとめによれば、この能力を司る規範的基準として、「量規範」、「斉一性規範」、「経験規範」、「信頼性原理規範」、そして「公平性規範」の五つを示すテキスト的エビデンスが存在する。近年の研究では、主に『人間本性論』第一巻第三部第十三節における一般規則論におけるテキストを根拠とした「信頼性原理規範」が注目を集める。これは、ある推論をなす二観念の随伴関係について、それが「永続的で、不可抗で、普遍的」である場合と、「変わりやすく、弱く、規則的でない」場合との区別が必要であり、前者は「我々の思惟と行為の基礎となる」一方、後者は「容易に覆される」とされる部分 (T1.4.4.1) を引き合いに、前者を「信頼性」という価値基準において規範的原理と見なすものである。なるほど、この解釈は上記他の四つの規範的基準全てを包含しうる包括的な価値基準を提示しうる。しかし、この問いが規範的問題である以上、やはりなぜ「信頼性」という価値基準が他の価値基準の可能性を斥けて採用されるべきなのか、というより高次の問いが生じるが、これを明確に示すテキスト的根拠は存在しない。

そこで、本発表では、上記引用箇所を典拠としつつ、「信頼性」というラベリングは用いずに、同巻第三部における因果論の最終節において論じられる、動物の因果推論と人間の因果推論との類似性に関する議論で言及される、我々の因果推論の本能的性格に着目することによって、問題の規範性の起源となる包括的概念として人間の生存的本能を提示する。

「真なる哲学」と謙虚さの徳  
——ヒュームの哲学への復帰の徳認識論的解釈——

京都大学大学院文学研究科博士後期課程 小泉雄紀

本稿の目的は、ヒュームが『人間本性論』一卷の結論部において見せる全面的な懐疑から哲学的探究への「復帰」がいかんにして可能となったのかについて、徳 (virtue) という概念を用いた整合的な解釈を提示することである。

よく知られているように、ヒュームは全ての信念と推論を対象とした強力な懐疑を提出する。しかしこれはヒュームの最終的な主張ではない。この懐疑はヒュームを、何を信じてよいのかわからないという「哲学的憂鬱と譫妄 (philosophical melancholy and delirium)」へと陥らせるが、ヒュームは哲学から離れて日常生活を送ることの内に懐疑の「乗り越え」を果たすかのように見える。そして好奇心と野心に導かれて再び哲学を開始するヒュームは、最早信念や推論の不確実さに絶望した単なる懐疑主義者ではない。

しかしこの哲学的探究への復帰は、ヒュームが自身の提起した懐疑という問題を解決したことを意味しない。むしろヒュームが採った戦略は、人間の自然本性に従うことで全面的な懐疑に対して無関心になるというものである。もしヒュームがただ懐疑を忘れただけなのだとすれば、再開されたヒュームの探究は再び同じ懐疑へと進んでしまうのではないか。ところが実際には、『人間本性論』の以降の巻で行われる哲学的探究においてはこうした全面的な懐疑や「哲学的憂鬱」は生じないのである。理性に対して一度は徹底した懐疑を行いながらも、その後では理性による推論を用いて探究を行うというヒュームの立場を正確に捉えるためには、「哲学的憂鬱」から哲学への復帰の間に何が起こったのかを明らかにしなければならない。

この問題に対しては、ケンプ・スミスの自然主義解釈を始めとしたヒューム解釈上のいくつかの立場から応答が可能であるし、実際に為されてきた。しかしそれらの解釈だけでは、ヒュームの哲学への復帰を説明するのに少なくとも不十分である。

そこで本稿ではまず、ヒュームが提示する哲学の段階的な発展に着目する。ヒュームが「偽なる哲学 (false philosophy)」と「真なる哲学 (true philosophy)」と呼ぶ二種類の「哲学」の内実を明らかにすることで、上述した「哲学的憂鬱」の前と後ではこの異なった二種類の探究が行われていることを示す。その上で諸先行研究を検討し、真なる哲学の中核となるものが「謙虚さ (modesty)」という徳であることを論じる。ヒュームの全面的懐疑から哲学への復帰、すなわち偽なる哲学から真なる哲学への発展は、この謙虚さという徳を獲得するまでのプロセスとして解釈される。

ヒューム自身が最終的に行う探究である真なる哲学は、ヒュームが『人間本性論』の読者に推奨する探究でもある。この探究が徳によって特徴づけられると示すことは、ヒューム哲学の徳認識論的な解釈と言えるだろう。本稿はこの可能性を提示するものである。

ヒュームにおいて宗教的信念はいかなる意味で自然なのか？

京都府医師会看護専門学校非常勤講師 西内亮平

本発表は、神の存在の信念をはじめとした宗教的信念が、ヒューム哲学においていかなる意味で自然なもの (*natural*) と言えるかを考察する。またこの考察を通じてヒュームの宗教論が単なる個別論点におけるキリスト教批判にとどまらず、ヒューム哲学全体に通底する主要なモチーフの一つであり、ヒュームの構想である「人間本性の学」と強く結びついたのであることを示したい。

ヒュームは、彼の死後に出版された著作『自然宗教に関する対話』(1779)において、登場人物の一人である懐疑主義者フィロの口を借り、自然神学の中心的な議論であるデザイン論証を批判した。フィロはデザイン論証を類比に基づく推論だと分析した上で、そこで見出される類比の程度の低さからデザイン論証の蓋然性はきわめて小さいと主張する。

これに対して自然神学を擁護する登場人物クレアンテスは正面からこの批判に応答出来ず、最終的には自然を見たときにそれが神によって設計されたものだとわれわれが感じてしまうという「計画性の感じ」に依拠しようとする。これはクレアンテスが宗教的信念を正当化する理性的な議論から撤退し、われわれの感性における事実として宗教的信念を説明していると考えられる。ヒュームは『宗教の自然史』(1757)において宗教の問題を「理性における根拠」と「人間本性における起源」とに大別したが、クレアンテスは宗教的信念がもつ理性とは異なる起源を示すことで、理性的議論から信念を擁護しようとした。

クレアンテスのように信念がもつ感性的な「感じ」を重視する姿勢は、ヒュームの他著作にも見られる。本発表で具体的に確認するように、それは『人間本性論』の「付録」(1740)や『人間本性論摘要』(1740)で顕著になり、『人間知性研究』(1748)にも引き継がれている。このことから、ヒューム自身の主張はフィロだけでなく一部クレアンテスによって代弁されており、この人物を通じて宗教の起源を人間本性から説明する試みが『自然宗教に関する対話』においてもなされていると言えるのではないだろうか。

また研究者の間では宗教的信念が、外界の存在の信念のような「自然信念」(*natural belief*)であるか否かが議論となってきた。自然信念というのはヒューム自身の用語ではなく、研究者の間で共通了解となっている道具的な概念であり、(1) 日常的、(2) 推論によって得られたのではない、(3) それ抜きでは日常生活が立ち行かない、(4) 普遍的という条件をすべて満たす信念を指す。R. J. バトラーなどは宗教的信念を自然信念だと解釈する一方で、J. C. A. ガスキンなどはこれに反対している。本発表はテキスト上の根拠などを示しつつ、宗教的信念は自然信念ではないことを明らかにする。しかし、宗教的信念が研究者のいう自然信念ではないとしても、人間本性にそったものである以上、限定された意味においてこれを自然なものと呼ぶのをヒュームは認めるであろう。本発表では、その限定された意味の内実をさらに検討していく。

## カント社交論における遊びとしての談話と議論

京都大学文学研究科 高木裕貴

カントその人にとってのみならず、カント哲学にとっても社交 (*Gesellschaft*) が重要な意義を持っていたことは否定できないだろう。カントは実際、「世界市民の見地における普遍史の理念」(1784年)から『実践理性批判』(1788年)を経て晩年に至るまで、様々なテキストにおいて社交論を展開している。また、カントは長年担当してきた人間学講義において、少なくとも批判期からほぼ一貫して社交論に言及していることも忘れられてはならない。『人間学』(1798年)『道徳形而上学』(1797年)『教育学』(1803年)といった晩年の著作に見られる比較的まとまった社交論はその集大成とも呼べるだろう。

社交はカント哲学にとって様々な意義を持っている。概念の重なり合いをあえて捨象するならば、社交は性格形成 (IX 484-485)、法的市民状態の確立 (VIII 20)、啓蒙 (VIII 20)、道徳化 (VI 473-474, VII 281-282, VIII 20) などに資するとされている。

このような背景の下、本発表は主に「遊び (*Spiel*) としての社交」という側面に着目する。先述した社交の意義はおしなべて、社交が遊びであるという点に依拠していると言える。換言すれば、社交が遊びとして捉えられないならば、先述の社交の意義は大きく減じることになるだろう。

さて、本発表ではこの社交論について主に二つの課題を扱う。カントによれば社交は主に談話 (*Unterredung*) を通じてなされるが、談話は遊びである (VII 152, 281)。カントは遊びの例として、芸術鑑賞や散歩を挙げているが、談話はいかにして遊びたりうるのだろうか。そこで本発表では、「世界市民の見地における普遍史の理念」における「非社会的社交性」や、「啓蒙とは何か」における理性の公的使用論との異同に着目しつつ、『判断力批判』や『教育学』の遊び論に注目することによって、遊びとしての談話の独自性を論じる。これが第一の課題である。

他方でカントはこの談話に遊びとは異なる要素を見いだしている。カントは、談話は、世間話 (*Erzählen*)・議論 (*Räsonnieren*)・冗談 (*Scherzen*) という三つの段階を経ると述べる (VII 280)。その中でも議論は主要な位置を占めている。議論において思想交換が行われることからしても、議論こそは談話の中心であるとさえ述べ得る。ところがカントは議論をししばしば遊びと対立する労働 (*Arbeit*) であると呼んでおり、その位置づけは定まっていないように見える。そこで本発表では、議論をいかにして遊びとして捉えることができるのか、という問いを扱う。これが第二の課題である。

## 『純粋理性の批判』における理念の仮象とその有用性について

大阪大学大学院文学研究科博士後期課程 三輪泰之

カントは『純粋理性の批判』においてまさに理性の批判を行う「超越論的弁証論」を展開するにあたって、そのほとんど始めにあたる部分において次のように述べる。

われわれのすべての認識は、感官から始まり、そこから悟性へと進み、そして理性で終わる (B 355)。

この区分に応じるようにして、カントは悟性に関する論理(「分析論」)を「真理の論理学(Logik der Wahrheit)」(B 87)と名づけるが、それに対して理性に関する論理(「弁証論」)を「仮象の論理学(Logik des Scheins)」(B 170, B 349)と名づける。真理の論理学と対になるのは虚偽の論理学(Logik der Falschheit)といったものであるという期待を抱くなら、このような命名については様々な疑問が生じるだろう。以上のような命名が行われたのは、「弁証論」には若干の込み入った側面があることに起因すると考えられる。実際のところ、「付録」を含む「弁証論」の話題は多岐にわたっており、明示されないまでも示唆的にとどめられた記述が多い。たとえばカントは「弁証論」を「仮象の論理学」と名づける際に、その主な目的を理性によって生み出される理念が「仮象」として「人を欺く」のを防ぐことにあるとしたが、その目的に覆い隠されるようにしてもう一つの性質が、すなわち理念は何事か「役に立つ」ということが示唆されていた (Vgl. B 385)。

本稿では主にこの「弁証論」で論じられる理念について、主に仮象的な側面に焦点を当てながら、同時にカントによって示唆されたその有用性について検討したい。そのための議論は以下の順序で展開される。まず、理性の能力がどのようなものであるかを出発点とし、それが仮象といわれるものに至る過程を追う。理性の生み出す理性概念すなわち理念の仮象とは、理性が条件づけられたものから条件を推論し、そして無条件的なものに至るという推論において見出されるものである。この無条件的なものは単に理論的な要件として求められるのみで、その真偽が保証されるものではない。その点からすると確かに理念には仮象として人を欺く性質があるが、しかしこのように案出される理性概念には利点もある。すなわち、この無条件的なものによって条件の系列がはじめてある種の全体性を得る、ということである。そしてこうした全体性を可能とする理念という観点から、その有用性について一考を加えてみたい。その有用性とは、一言でいえば、悟性に対して特殊な統一を与え、人間の諸認識のために、すなわち探求一般に関してある種の方向づけを与えるために役立つものである。そして以上の点を指摘することによって、「弁証論」をカントが命名した単なる「仮象の論理学」としてではなく、さらに一種の「探求の論理学」とみなすための端緒を与えたい。



## 目的概念としての「目的それ自体」

関西学院大学大学院研究員 八木緑

カントは『人倫の形而上学の基礎づけ』において「目的それ自体」という概念を導入した。それは、あらゆる理性的存在者が絶対的価値をもつことを表し、それゆえに理性的存在者は他の存在者とは異なる仕方で扱われるべきだとする、いわゆる定言命法の第二定式の根拠をなす。カントの実践哲学の不可欠な構成要素であるこの概念が哲学的観点から見ても重要であることに異論はないであろうが、しかし「目的それ自体」をめぐって今もなお活発な議論が続けられていることは、この概念が示すものの奥深さ、掘みかたさを物語っている。

「目的それ自体」の解釈において主に焦点とされてきたのはその絶対的価値の裏付けである。なぜ理性的存在者は不可侵な尊厳をもつのか、その価値は理性的存在者のいかなる特性や能力に由来するのかということが問題圏の中心を占めてきた。しかし「目的それ自体」を価値や尊厳の担い手としてのみ捉えるようなアプローチでは、「目的それ自体」という表現の根本的な意味が見逃されてしまう。カントは「目的それ自体」を明確に目的概念のひとつとして扱っており、したがってなぜ理性的存在者が目的として見られなければならないのかという問題は、そもそもカントにとってなぜ「目的」という概念が必要であったのかを問い直すことから始められなければならない。

「目的それ自体」が「目的」であることがあまり問われてこなかった主な理由として、カント自身の叙述に照らして次の二つを挙げることができる。ひとつは、定言命法を目的と切り離すべきだというような主張がなされていることである。周知のように、カントは定言命法を「何か別の目的のため」の手段を命じる仮言命法と峻別し、端的に義務の遵守を命じる形式として提示した。もうひとつは、「目的それ自体」が一般的な意味での目的概念とは全く異なるものとして定義づけられているように見えることである。カントによれば「目的それ自体」は傾向性に基づく主観的目的とは違い、単なる理性によって与えられる普遍妥当的な原理である。

本論文は、「目的それ自体」が「目的の主体」であることに着目し、目的を有するということが単に個々人が主観的目的の表象をもち、多様な主観的目的から成る手段-目的連関に日常的に関わっている事実にとどまらず、理性的存在者の存在様式として、自分および他者に対する振る舞いを根本から規定していることを明らかにする。理性的存在者を「同時に目的として見よ」というカントの主張は、各々の「目的それ自体」が行為を通して展開されていく目的そのものであるということ、そしてそのあり方は、何をなすべきか、何をなしうるかに関する事柄以前の、理性的存在者の本性に根ざした固有の態度に他ならないということ踏まえて理解されねばならない。

動くものを掴む  
——体験に意味・意義を与えること——

関西大学非常勤講師 上島洋一郎

私たちは、あの時はつらい経験だったが今思えば良い経験だったと振り返り、先行きの見えぬ将来に慄いては今の生活を見つめ直す。経験や生活あるいは人生という言葉で自分や他者の諸体験のまとまりを名付け、それらに意味 (Sinn) ないし意義 (Bedeutung) を与える。なるほど、体験と意味ないし意義あるいはそれに類するカテゴリーとの結びつきについて心理学や社会学その他多くの学問が関心を向け続けてきたのは明らかだ。むしろそれゆえにこそ疑問に思えるのは、体験に意味ないし意義を与えるというこの事柄がなぜこれほど多くの領域を跨いで行われうるのかということである。

この問いに対して社会や科学の領域での概念史を網羅的に考察することは本発表者の手に余る。そこで本論はデイルタイによる精神科学の基礎づけを手掛かりにしてこの問題への足掛かりを得たい。なぜなら、彼は体験に対して意味および意義カテゴリーを精神諸科学が用いることの認識論的根拠を論じているため、彼の議論は我々が様々な領域で体験に意味や意義を当てはめている事情の一端を明らかにするからである。

本論では以下の順序で三点を明らかにする。(1) 意味と意義を精神科学に特有なカテゴリーであるとデイルタイが考える第一の背景について。彼は認識論的論理学の中で精神科学に可能なカテゴリーの根拠を問い、意味と意義カテゴリーをその例として挙げる。その後、彼はフッサール『論理学研究』における体験の静態的分析に注目していくのだが、すぐにその分析方法の限界を意識し、体験の動態性に適したカテゴリーの整理に向かっていく。そうした中で体験の意味と意義の関係は体験連関の全体と部分の関係として規定され、両者は一対で精神科学の中心的なカテゴリーとなる。(2) 第二の背景は、歴史哲学への批判にある。特定の目的へ向かう人類の進歩という歴史哲学が抱く想定への批判において、デイルタイは意味と意義を歴史の全体と部分に振り分ける。というのも、個人にとって体験の連関が人生経過とともに揺れ動くのと同様に、諸個人の相互作用から成立する歴史社会の連関もまた歴史経過とともに揺れ動くとは彼は考えるからである。したがって、意味と意義の役割とは、歴史の終極的目的を想定せずにこの揺れ動く歴史的諸事象を規定することにある。(3) このように個人と歴史社会の理解のために意味と意義カテゴリーが有用である理由は、意味と意義の循環する規定性と全体の非閉鎖性にある。変転する個人の人生と歴史の全体はその動きのさなかに掴まれねばならない。そして意味と意義は規定しあい、かつ、体験全体は常に変化するため、意味と意義は人生と歴史全体に寄り添って変わり続けられる。最後に本論は人生の物語り論や歴史叙述を参照し、意味と意義の循環規定性と全体の非閉鎖性が我々の体験理解を実際に条件づけていることを確認したい。

本発表はアンリ・ベルクソン（1859-1941）が最後の著書『道徳と宗教の二源泉』（1932）においてたどり着いた道徳哲学を、彼の思想的発展との連関において考察するものである。道徳とそれに結びつく宗教についての考察は、『意識に直接与えられるものについての試論』（1889）において、時間と自由についての考察から出発したベルクソンが、『物質と記憶』（1896）と『創造的進化』（1907）というふたつの成果を踏まえつつ、最後に問うた問題だった。しかしながら、『道徳と宗教の二源泉』の出版は前著『創造的進化』から25年という歳月を経ており、その内容はたしかに『創造的進化』の延長線上にあるとみなせるものの、道徳と宗教というその主題からしても、それ以前とは異なる方向性をしめしている。そのためもあってか、ベルクソン哲学を認識論や存在論として読み解こうとする場合、『二源泉』はその考察から外されるか、補足的に言及されるにとどまることが多い。同書において特権的人物としてあげられているのがアッシジのフランチェスコやアビラのテレサといった神秘家たちであることが、こうした傾向を助長したことは想像に難くない。しかしベルクソンの道徳論には、それまでの彼の思想のすべてが流れこんでおり、それを検討することはベルクソン哲学全体を検討することでもある。したがってこの道徳論を考察することで彼の独特の発想や思考法をあらためて浮かび上がらせることができるだろう。本発表では『二源泉』における道徳論を『試論』以来の時間論、自由論と接続させることで、ベルクソンの思想の発展を跡づけるとともに、彼の思想において自由と道徳、あるいは義務や行為がいかに関係を結ぶかを考察する。

そのために本発表では、ベルクソンの思想をカントの道徳哲学と比較しつつ論じることを試みたい。周知のように、自由と義務はカントの道徳哲学の中心をなす概念であった。ベルクソンは終始カントに対し批判的だったが、両者ともに自由の存在や魂の不死あるいは存続を肯定し、哲学史上の大問題を人間の知性ないし理性に由来する錯覚とみなすなど、実のところ表面的には類似する点も見いだされる。しかしその内的な論理構成は全く異なっており、カントの思想と比較対照することでベルクソンの独特な論理をより際立たせることができるだろう。カントの倫理学においてはあくまでも人間性を高めることが目指されているのに対し、ベルクソンの主張はやがて、神秘家による人間の条件の超越へと向かうことになるが、そこには人間や、人間の知性ないし理性、自由に対する両者の全く異なる発想と論理が存在しているのである。

## 絶対平和を目指す弁証法的行為の方位

津山工業高等専門学校名誉教授 川島焄三

田辺元の「懺悔道としての哲学」の「序」の最後の段落に「絶対平和」という言葉が使われている。この「序」は1945（昭和20）年10月に書かれたものである。これは原爆投下という人類初めての暴挙に対する人類最初の悲痛な叫びであった。西洋の列強の植民地政策に対して「種の論理」を掲げて日本民族の団結を呼び掛けてきた田辺は、日本国の思想的指導者として、戦争への突入だけは避けたいと思いつつ、太平洋戦争への突入を心ならずも容認しなければならなくなった。数学や物理学にも大変詳しく、彼は当時の自然科学がどんな状況であったかをよく承知していたが故に、量子論と相対性原理を絶対無の媒介に転じ、弁証法的な実験が間近に原子の威力を実証することを予感していた。この原子の威力を戦争の道具にしてはならないと考えていたからこそ、彼は西田先生にお願いしてでも、戦争への突入だけは避けようと奔走した。しかし突入してしまった。

人間のあらゆる活動を含めて大自然の状態を正常な状態に維持することが絶対平和であるとするならば、放射能汚染や大気汚染や海洋汚染や異常気象のない住みやすい地球環境を維持することが要請される。哲学は絶対を求める学問であるという田辺は、それぞれの学問をコントロールする知恵を哲学が引き受けなければならぬと考えている。それぞれの学問は独自の領域と原理・原則を持ち、分野ごとの歴史がある。それぞれの学問は細分化が進み、同じ学問分野でも、全体を見渡すこともできない程に進化している。そこに客観的で普遍的な原理が如何にして可能かという全く新しい問題が生まれてきた。

田辺の「哲学入門」はそんな学問原理を整理するために、戦後、俗界から北軽井沢の大学村にひきこもり、訪ねてくる弟子たちに講義したものである。細分化が進み無数の領域を持つ学問が開発されようとしている現在、客観的で普遍的な知識は如何にして可能かという課題が全く新しく問われている。そのような状況にある学問に共通して言えることは、その求める方向が「公」の利益のためであり、「他者」の利益のためであり、「私」つまり「自分」の利益のためではないということである。

人はこれまで、自分が生きるため、自分の利益になるものを求めてきた。その結果が世にも悲惨な原子爆弾だとすれば、既にその方位は否定され、「絶対平和」への道が求められ始めたことになり、そのための方策が求められていると考えるべきであろう。それは「他者」のため、「公」のための活動が弁証法的に生れてきたと言っても良い。

人は生きることに際して様々な欲望を持ち、生きるために他者を犠牲にしても、自分が勝ち残る方策を求めてきた。しかし「絶対平和」への道は欲望をコントロールする知恵を育てることが求められる。

初期ハイデガーにおける哲学理念の把握根拠  
——そのモデルニテート、ないしは今日性について——

京都大学大学院文学研究科博士後期課程 樽田勇樹

ハイデガーの『存在と時間』（1927年）は、ギリシア哲学の独特な摂取によって特徴づけられるが、その元型となるアリストテレス解釈は、1920年代初めに準備された。中でも、1921/22年講義「アリストテレスの現象学的解釈／現象学的研究への入門」、および1922年の「アリストテレスの現象学的解釈（解釈学的状況の告示）」は、そのための解釈学的立脚点を主題としている。それによればアリストテレス解釈は、それ自体が歴史（哲学史）の解釈であるものとして、「現在」の状況に深く定位して企てられねばならない。なぜならハイデガーの言では、「過去が自らを開くのは現在が用い得る覚悟と開示力に従ってのみ」だからであり、また解釈は常に、現在の状況においてこの状況に対して「時熟する」ほかないからである。

ところでこれらの草稿は、「哲学」がはっきりと「存在論」と定義される点において、ハイデガーの思想の展開史という観点でも注目し得る。然るにこの哲学定式は、まさに上述の連関で、アリストテレスの歴史学的解釈のための条件として、「哲学とは何か」を暫定的に規定するという文脈で、言われるものである。——してみれば、一見アリストテレス『形而上学』の一節を繰り返しているにすぎないこの哲学把握は、実のところ、それほど単純ではない脈絡を織り込んでいるのである。事実、注意して読むなら、「哲学とは何か」という件の問いは、ハイデガーが「現在」や「今日」と特徴づける状況の中で問われるのであり、それに応じて問われる哲学の概念が含む意味の幅も、既にこの状況を映していることが理解されるのである。

それ故、本稿は次のように主張する——ハイデガーの哲学把握を理解するには、彼の「今日」の状況からの動機づけという脈絡が考慮されねばならず、この把握の持つ批判的な射程もまた、ここから汲み取られねばならない、と。本稿はこの連関を、「哲学とは何か」をめぐる上述の文書の議論の注釈作業を通じて明らかにすることを意図するものである。発表では第一に、ハビリタチオン以来若きハイデガーが一貫して「現在」や「今日」、「モデルネ」の状況に定位して哲学研究の課題を捉えていたことに注意を向ける。その際この「モデルネ」のモデルニテート、「今日」の今日性が何に存するのかを論じることで、まずは上記の文書を読む視角を確保する。第二に、上の二つの文書、とりわけ1921/22年講義における「哲学とは何か」の議論——そこには、同時代における哲学の問われ方に対する批判が含まれている——を注釈することで、彼が哲学を規定する際の前提となる諸論点を明らかにする。これらの作業を通じて本稿は、ハイデガーの哲学把握の規定根拠としての今日性ないしはモデルニテートを捉えるとともに、この哲学把握が伝統的な哲学把握のおおまかな傾向に対するいかなる批判的な射程を織り込んでいるかを理解することを試みる。

未完成な『スピノザと表現の問題』  
——不十分な表現的生成の理論——

大阪大学大学院人間科学研究科 佐々木 晃也

本発表の目的は、ドゥルーズの『スピノザと表現の問題』（以下『表現の問題』）の未完成さ、及び、その内実としての表現的生成の理論の不十分さを示すことである。

1. 『スピノザと表現の問題』の未完成さについて

ドゥルーズのスピノザ解釈は概ね三時期に残されている。70年頃の『表現の問題』（1968）、80年頃の『スピノザ 実践の哲学』（1981、以下『実践の哲学』）、90年頃の「スピノザと三つの『エチカ』」（1993）が代表的である。しかし、単にこの史実から、第一のスピノザ論『表現の問題』が「未完成なもの」である、と言うことは出来ない。Dosse（2007）によれば、実質的な内容からすれば、『実践の哲学』は『表現の問題』を乗り越えていない。

そこで発表者は、この二著の間に位置する『ダイアローグ』（1977）の中で示された、スピノザについての「無理解」の意味を文献学的に明らかにすることによって、『表現の問題』がいかなる意味で「未完成なもの」であるか、を示す。

2. 表現的生成の理論の不十分さについて

『表現の問題』のインパクトは二つある。第一のそれは、スピノザ哲学の隠れた原理としての「表現 expression」を、通時的かつ共時的な哲学史的意義において顕示した点にある。こうしてフランスの国民的哲学者 R. Descartes の影で、異端な合理主義者の一人に過ぎない哲学者とされていたスピノザは、絶対的内在の哲学の完成者として蘇ることとなった。とはいえこのインパクトは、当時（60年代末）の思想界における趣が強い。

『表現の問題』の現代にも続くインパクトは、第二のそれ、むしろドゥルーズ自身の過激さが表現されているように見えるスピノザ哲学の経験主義的解釈にある。第9章にてドゥルーズは、表現的内在の存在論に必然的に由来する仕方で、スピノザの根本的な経験主義を主張し、同時に、第三部（第11～19章）での理論展開を支配することとなる問題を提示する。すなわち、必然的に非表現的な存在者である我々はいかにして表現的になるのか。後代のスピノザ研究者が、時にドゥルーズのスピノザ解釈を「過激な誤読」と退ける理由は、この問題に応じて展開された表現的生成の理論の内にある。そこで発表者は、この理論の内実をドゥルーズ自身の規範に従って検討することで、未完成さの証左とも言える、ドゥルーズ自身にとっての不十分さを示す。

3. 結論に代えて

発表者は、2.で示す不十分さを補うような議論が78年のスピノザ講義録に現れていることを確認することで、70年頃の解釈と、一連の講義録を含めた80年頃の解釈とが区別されるべきものである、という可能性を指摘する。

ミリカンによるドレッツキ批判は成功しているか  
——「意味の自然化」プロジェクトの観点から——

関西大学企画管理課 榎本啄杜

本発表の目的は、ミリカンが『意味と目的の世界』において展開した、ドレッツキの情報意味論に対する批判を検討することを通じて、ドレッツキによる「意味の自然化」プロジェクトの是非を検討することである。

ドレッツキは『知識と情報の流れ』において、情報に関する実在論に基づいた情報意味論を展開した。この理論によると、「情報」は、言葉やそれを解釈する主体とは独立に、客観的なものとして世界に流れているものである。そのうえで、ある信号  $r$  が「 $s$  は  $F$  である」という情報を伝えるためにはある 3 つの条件を満たしていなければならない、この 3 つの条件から導かれる結論として、「信号  $r$  が『 $s$  は  $F$  である』という情報を運ぶのは、 $r$  が得られたときに  $s$  が  $F$  である条件付き確率が 1 である場合だ」というものが得られる。

これに対してミリカンは、実際に情報が流れていると思われるような直感的な事例を挙げることで、条件付き確率が 1 未満であっても情報が流れる可能性を指摘している。ここから、ドレッツキとミリカンにおける違いは、通信路に条件付き確率 1 という定常性を求めるかどうか、より詳細には「あいまい度」について 0 という制約を求めるかどうかにあると言うことができる。つまり、ドレッツキは情報が流れる条件としてあいまい度 0 を要求したのに対して、ミリカンはあいまい度が存在していても情報が流れることは可能であると主張した。

しかし、ドレッツキがあいまい度に関して上記のような制約を設けたのは「意味の自然化」プロジェクトを念頭に置いていたため、つまり、「意味」という現象がいかんして可能になるのかを、物理的現象だけを用いて説明したかったためである。一方のミリカンの批判は、意味現象がすでに存在している世界を前提とした認識論的観点からの批判であるため、批判のレベルがずれていることになる。ドレッツキのあいまい度に関する制約が成功しているかどうかは、ミリカンのような認識論的観点からではなく、意味の自然化にとっての制約として成功しているかどうかを問うことによって答えることができる。以上を踏まえ、本発表では、(1) ミリカンによるドレッツキ批判が、ドレッツキの想定するレベルとは異なるレベルにおける批判になってしまっていること、(2) ドレッツキの想定するレベルに照準を合わせたとしても、「意味の自然化」プロジェクトは成功していないことを論じる。